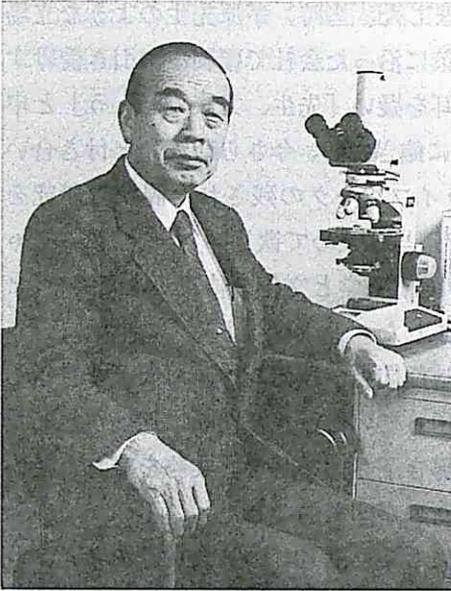


「茅原先生の死を悼む」

代表取締役社長 中山輝也*



茅原先生の突然の訃報に接したのは、私が遅い夏休みを取ってモンゴル旅行から帰国の途中でした。

すぐに参上し、お悔やみを申し上げるべきところ、これが叶わず、到着出来たのはしめやかに執り行われたお通夜の終わる時で、ここに深くお詫び申し上げます。

私が、茅原先生のお元気なご様子を最後に拝見したのは、つい先日、八月五日、私の会社の恒例行事であります夏祭りにご臨席いただいた時でした。

先生はご来客の皆様や会社関係者とにこやかにご歓談なさっておられました。

その時、涼しくなる秋を待ってお会いすることをお約束しましたが、そのことを思うと本当に残念でなりません。

茅原先生とは、私が新潟大学地質鉱物学科へ入学したとき以来のお付き合いです。先生のご指導を受けて五十年にもなります。新潟大学時代の茅原先生は皆様が周知ですので省略します。

在学中は当然のこと、種々お世話になっていたのですが卒業論文の指導教官として山形県のフィールドまで何回もお出かけ下さいました。卒業時は資源開発不況で、希望の専門分野への道が閉ざされた時代で進路についてご自身の経験を例にアドバイスして下さいました。

私が十年余り勤務した新潟県庁でもお世話になり、私が配属されていた企業局や土木部でも茅原先生と親しくお付き合いさせていただきました。

若くして役所を辞め、商売を始める際もその頃よく使われた「寄らば大樹の陰」ではなく、「大変だろうがのびのびとやってみては…」とおっしゃいました。今でこそアントレプレナーなどともてはやされますが、当時は「脱サラ」。世間から見て蔑まれた言葉でした。

先生は以前から地域の大学は卒業生を地元へ送り出し、企業への就職、可能なら企業を創造し、大学の持つ学術、技術そして知恵と連携させること。そしてその企業を育て、同窓会、後援会活動を通じて大学を活性化させる。結果として地域を発展させることになる。アメリカの大学が以前から行っているようなお考えをお持ちでした。

*株式会社キタック

商売を始めてからは更に先生のご指導を受ける機会が多くなり、未だよちよち歩きの会社を見守って下さいました。

茅原先生の定年直前のころ、私が二年ほど新潟大学で実務の講義をさせていただいたことがありました。その時のアフターファイブの席でこっそり「定年になったら君の会社に行きたいが採用してくれるかね」と突然おっしゃいました。当時、茅原先生のような立場の方は大学で講義をされるか、資源開発の分野の国策に沿った会社で顧問をお引き受けするのが一般的だったと思います。したがって、我が耳を疑い「先生、冗談でしょう」と申し上げました。「僕、本気だよ。半世紀近い教師生活に飽きたし、今さら新人類と付き合いたくもない。大勢の教え子達と共に仕事が出来、ライフワークの残された課題の研究を少々出来れば最高だと思うよ。給与は沢山必要ない。適当に決めて欲しい」とまでおっしゃいました。ライフワークの一つ「ヒスイ」に於いては、自然科学と文化を結びつけた書籍「ヒスイ文化を読む」のご執筆をお願いしたこともありました。

会社では、最高顧問として常勤され、業としての地位向上、技術レベルの向上を目指して、文字通り一生懸命にご指導下さいました。私が困っているとき、判断に迷いが生じたとき、茅原先生はそれを読み取り、正しい方向へお導き下さいました。業務を離れた社内行事などでは若い社員よりも積極的に参加されていたのが印象的でした。

会社が少しずつ大きくなるにつれて、私が生意気にも業を通じての社会貢献を考え、財団法人環境地質科学研究所を設立した際には、役員として初代の研究所長になっていただき、その後、後進に道を譲られ、名誉理事長として適確なご助言をいただいております。

また、会社勤務のかたはら新潟県自然保護審議会の委員長などを多数お引き受けになり、県政に貢献されたことも特筆されることです。その間に勲二等瑞宝章や環境庁長官賞を受賞されました。

会社には八十歳まで十五年常勤された間、平成十年頃をピークに私共が得意とする社会資本整備費が減少傾向にあることを憂い、公共投資のあり方について自論を展開していらっしゃいました。

会社が八年前、ジャスダック市場へ上場を許されました。これで財務内容だけでなく、コンプライアンスを含めた会社としての総合力がつき大きな社会的信用を得ることが出来ました。

それと同時に地質調査業の分野で地域業者でありながら、規模、技術力ともに全国で十指に入るほどに評価されるようになりました。これもひとえに茅原先生のお力添えと申しても過言ではありません。

最近でこそ少なくなりましたが、平成十三年末、会社をお辞めになってからも頻繁に来社され勤務されていたときと変わらぬ様子でした。

また、私がシンポジウムなどで発表する時は、いつも会場のどこかで見守って下さっていたお姿を忘れることが出来ません。

先生との永遠のお別れは未だ未だ先のことと思っておりましたのに、残念でなりません。

先生は常に私の行動を時には厳しく、そして時には限りなく愛情を込めて、まるで幼な子のような澄んだ目で、見続けてくださいました。

今、私の脳裏には先生が真剣に語ってくれた言葉の数々、ふとした時にみせたあの時の笑顔がくっきりとよみがえってきます。

こんなにもあっけなく幽明相隔てることになりましたことは、淋しい限りです。心からご冥福をお祈り申し上げます。